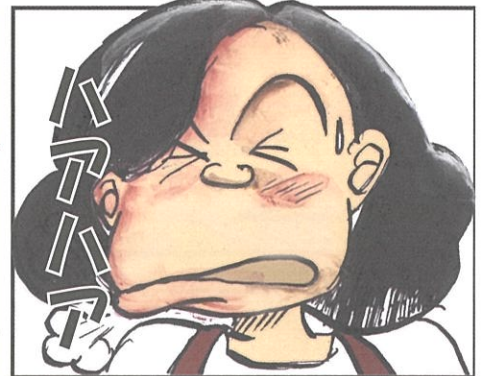
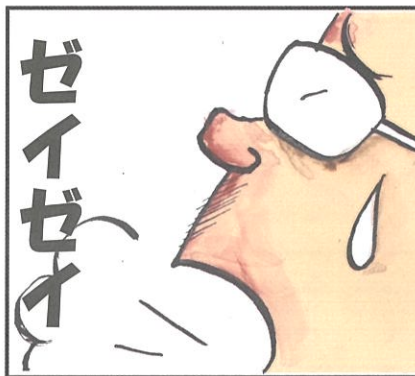
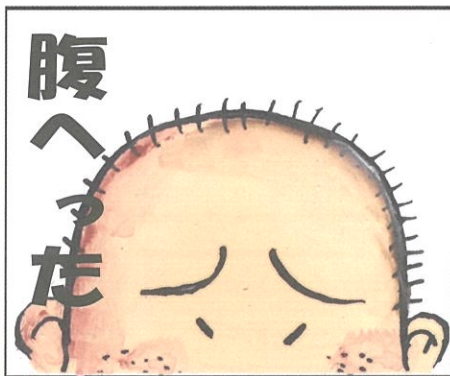
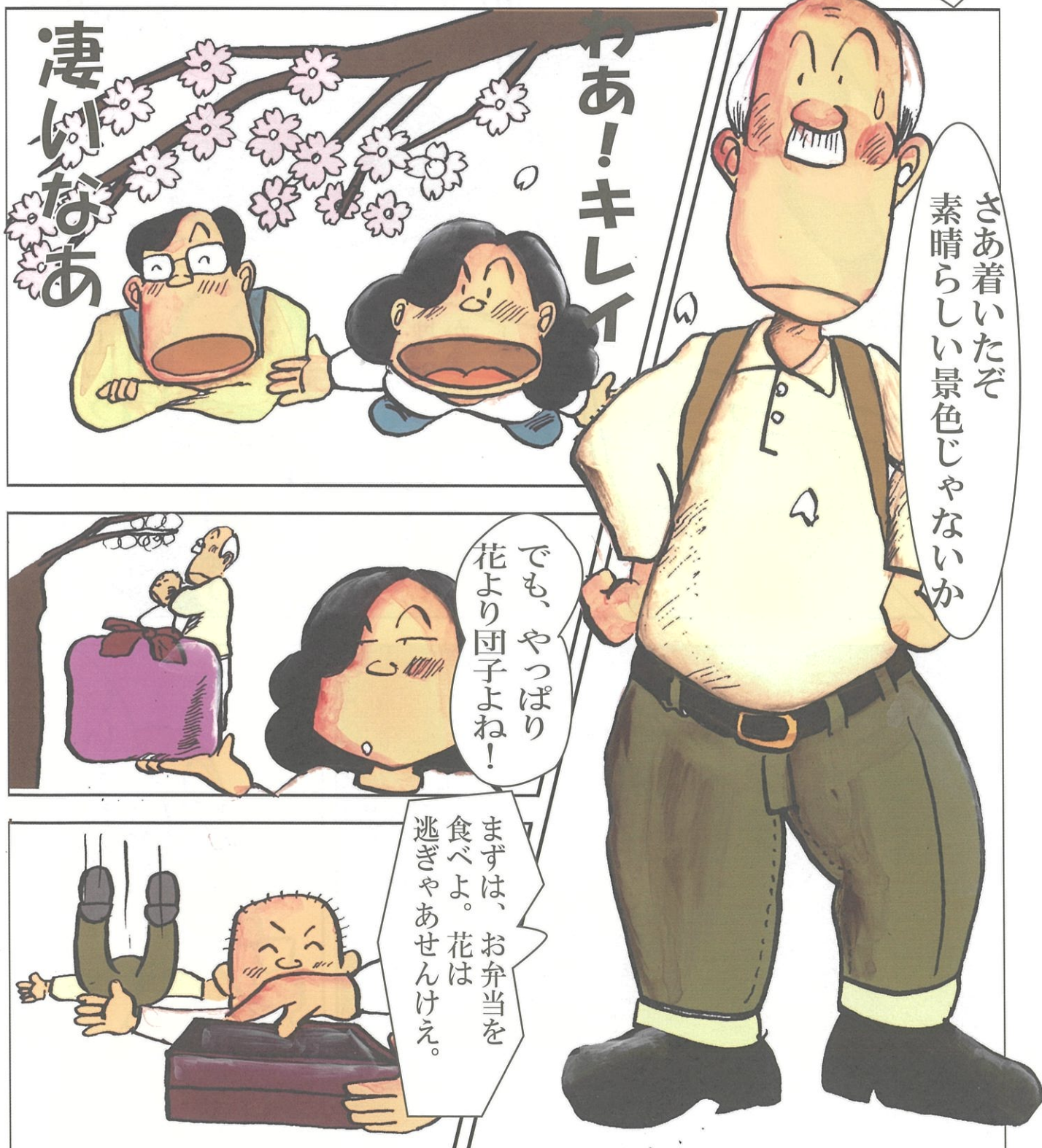
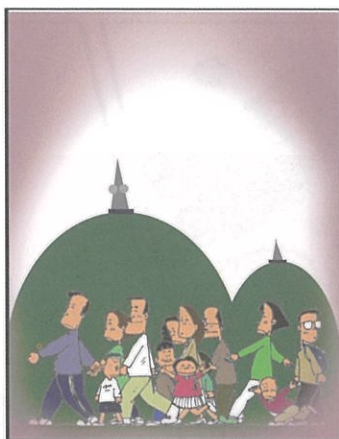


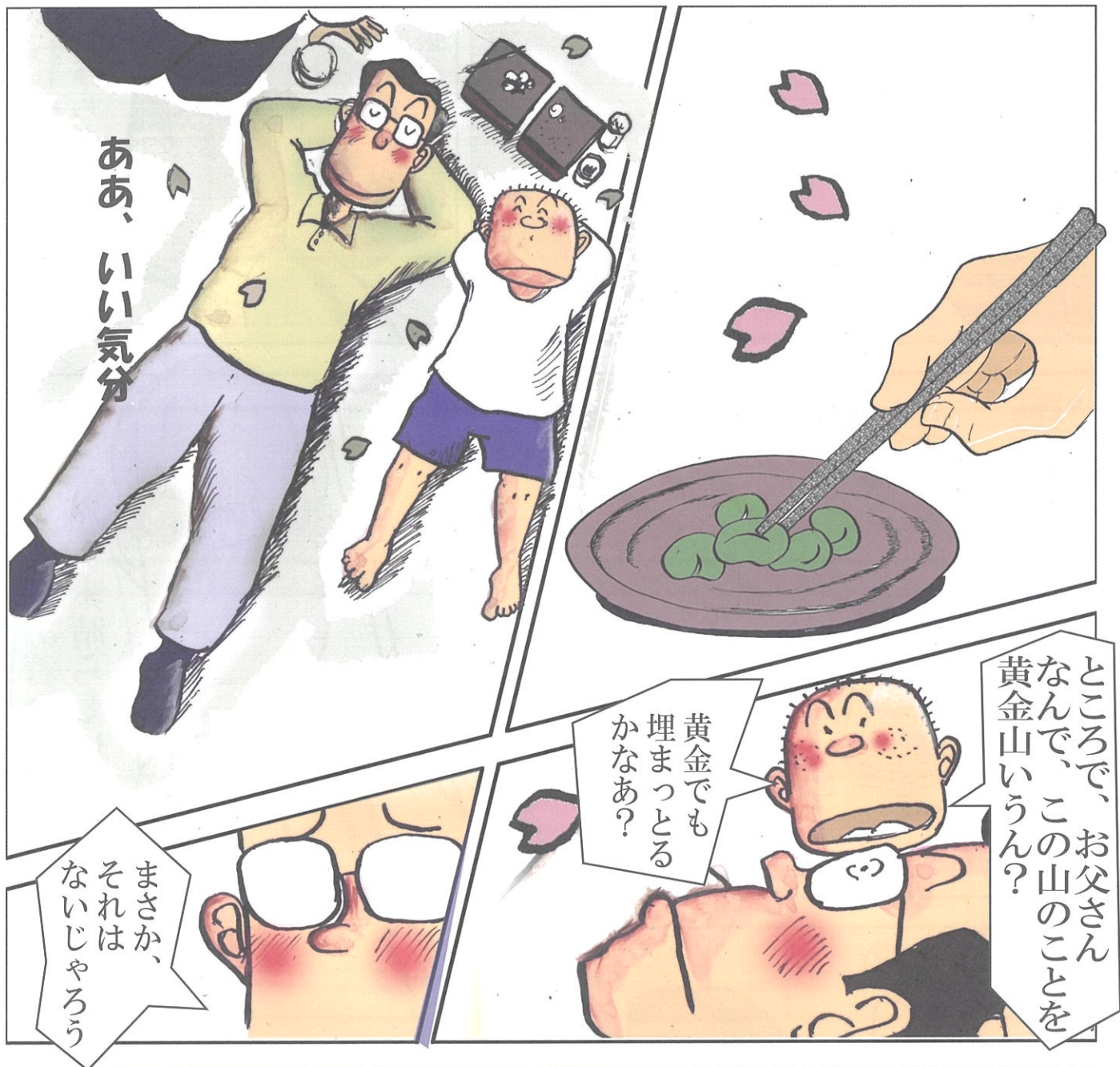
黄金伝説

南区七大伝説











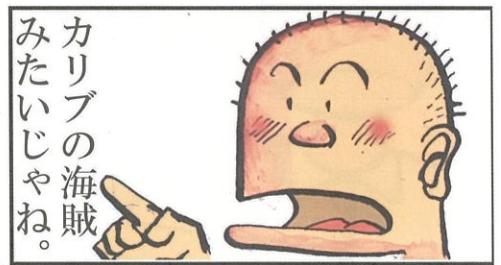
海賊が、金塊を
埋めたという話が
伝わっとるんじや



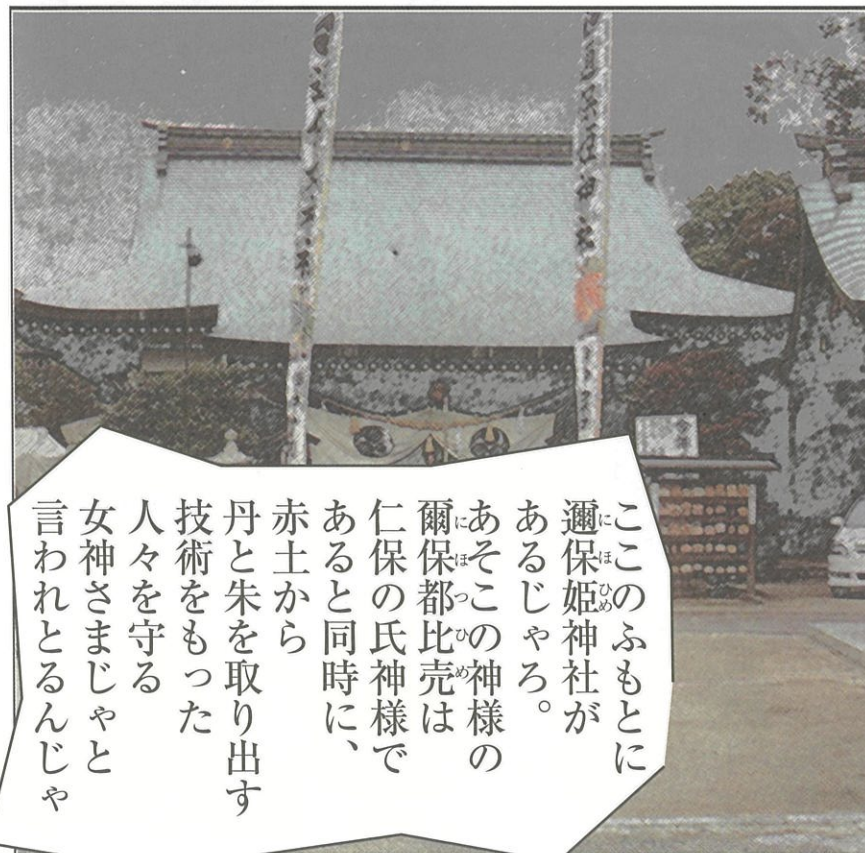
瀬戸内海にや
ようけえ海賊がおつてのお
ここにもようきよつた
らしいんじや



じいちゃん！
いい加減な
ことばかり
言わんでえ！
本気に
するじやない



カリブの海賊
みたいじゃね。



ここのふもとに
邇保姫神社が
あるじやろ。
あそここの神様の
邇保都比売は
仁保の氏神様で
あると同時に、
赤土から
丹と朱を取り出す
技術をもった
人々を守る
女神さまじやと
言われとるんじや



うん、聞かせて

名前のいわれは
他にも色々あるんでえ
知りたいか？



昔、天然の赤土
は丹といって
とても神聖な
品じゃったんじや。
そして仁保島は
丹の産地で
あすか・ふじわらきよう
飛鳥・藤原京の
神社や社寺の塗装に
使われとったんじや



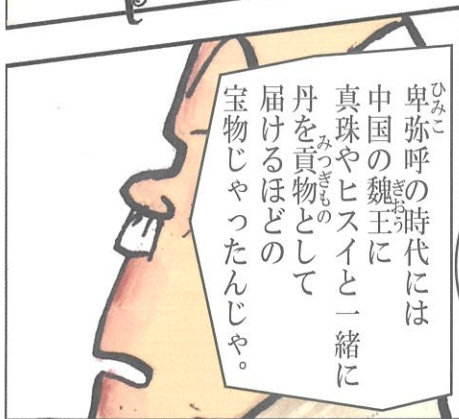
まあ、最後まで
聞きんさい。



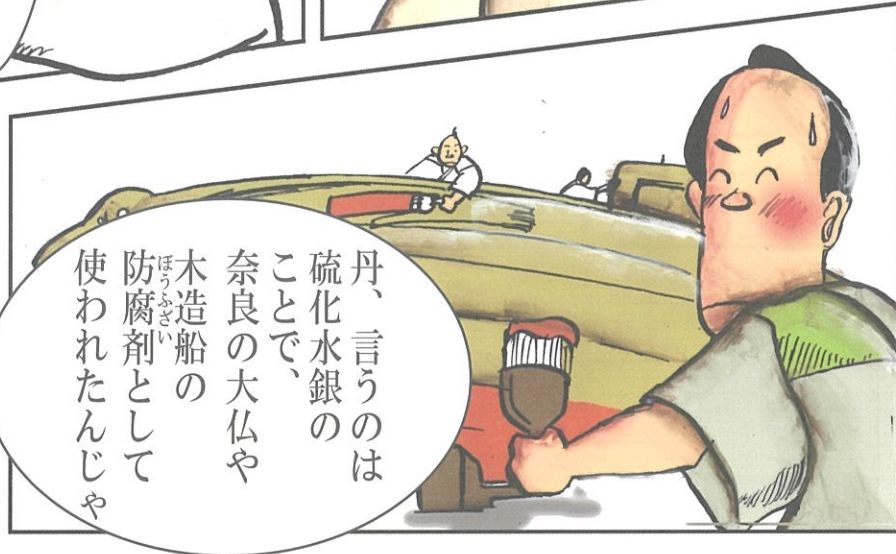
丹と黄金が
どうつながるの？



南区に、丹那いう町が
あるじやろ。
丹いう名が付くように
相当の産地じゃったん
じやろうてえ



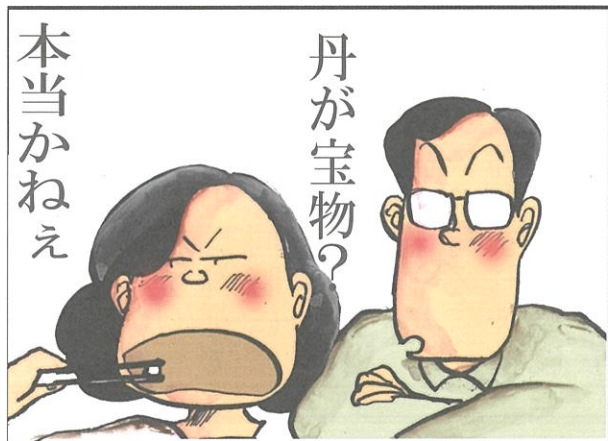
ひみこ
卑弥呼の時代には
中国の魏王に
真珠やヒスイと一緒に
丹を貢物として
届けるほどの
宝物じゃったんじや。



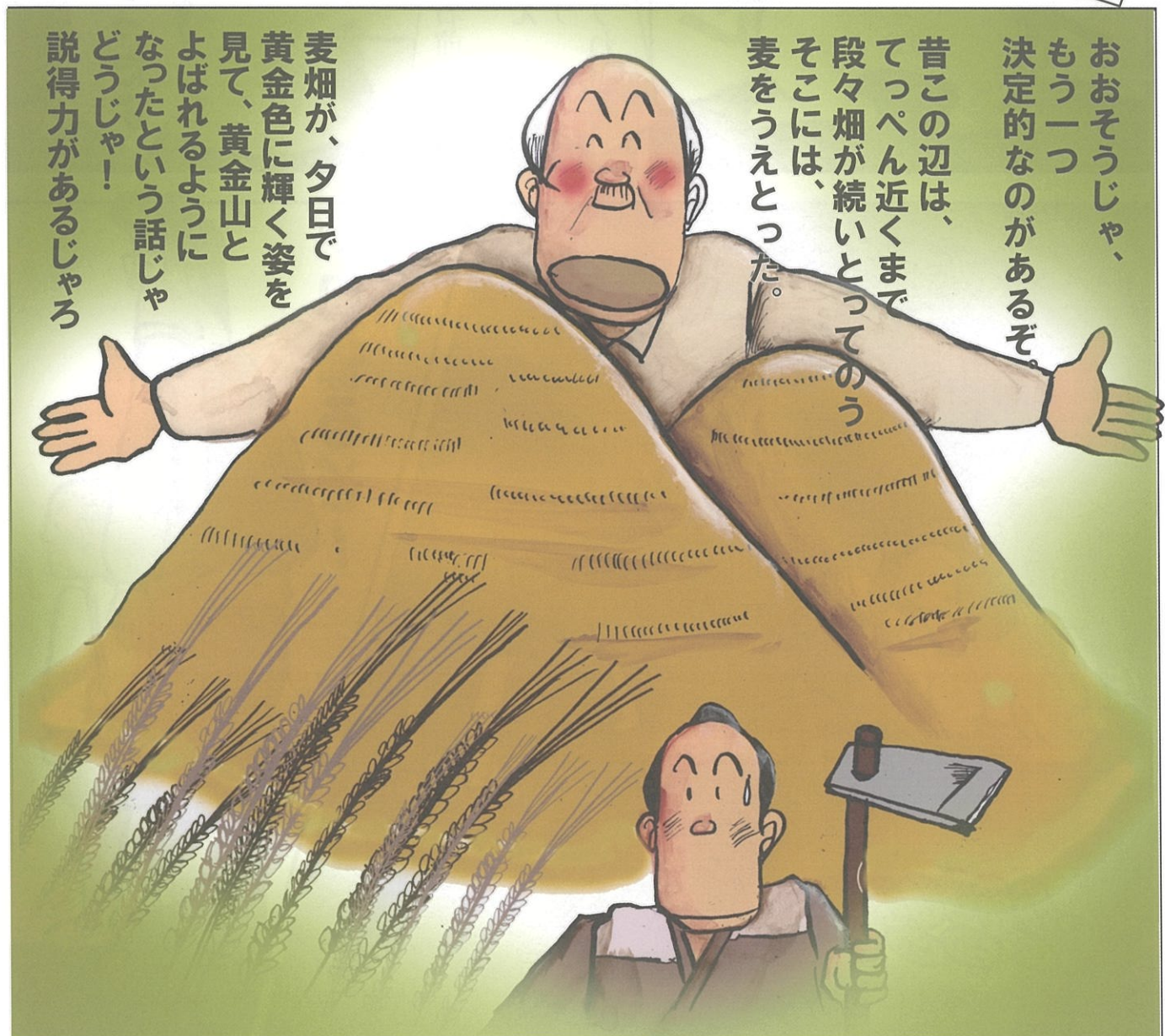
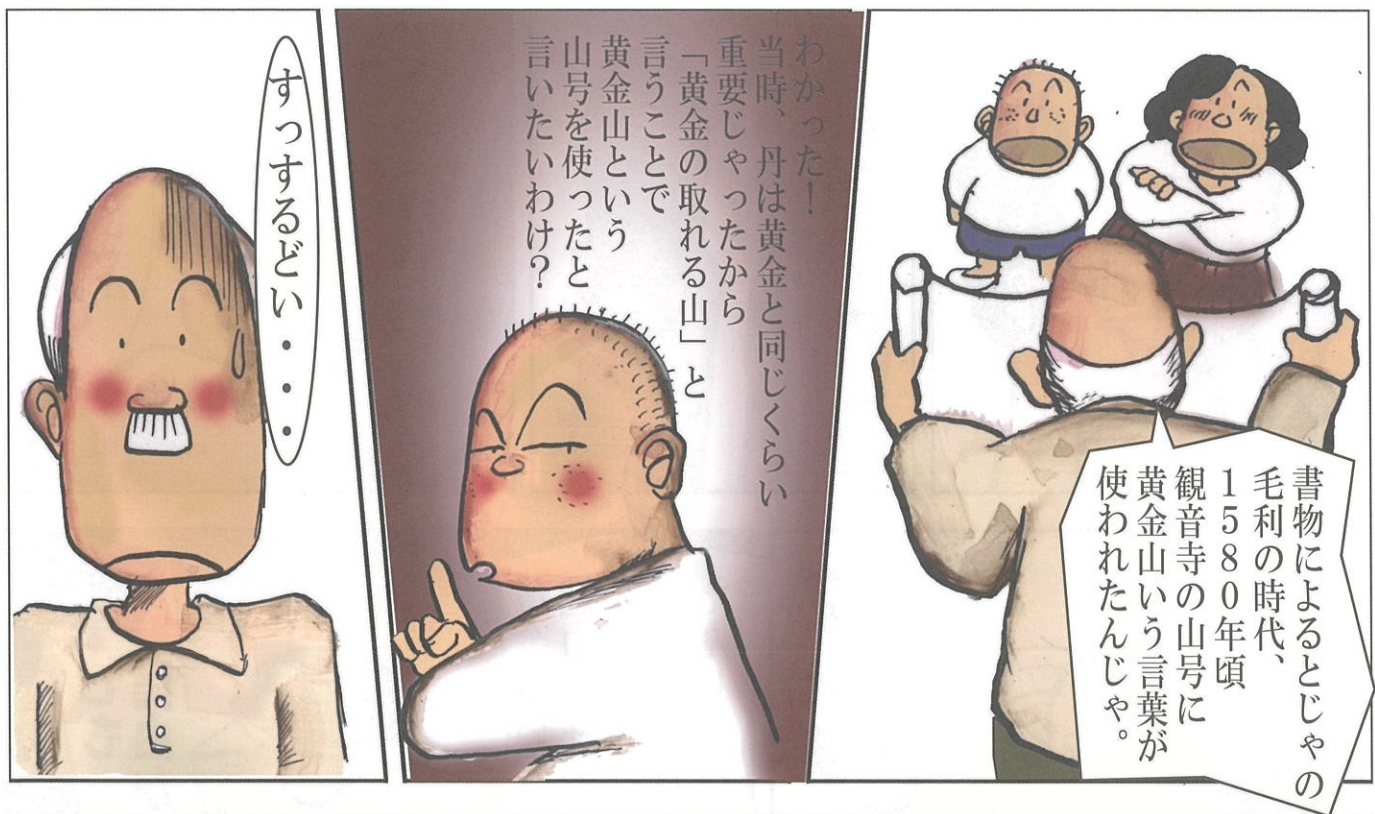
丹、言うのは
硫化水銀の
ことで、
奈良の大仏や
木造船の
防腐剤として
使われたんじや

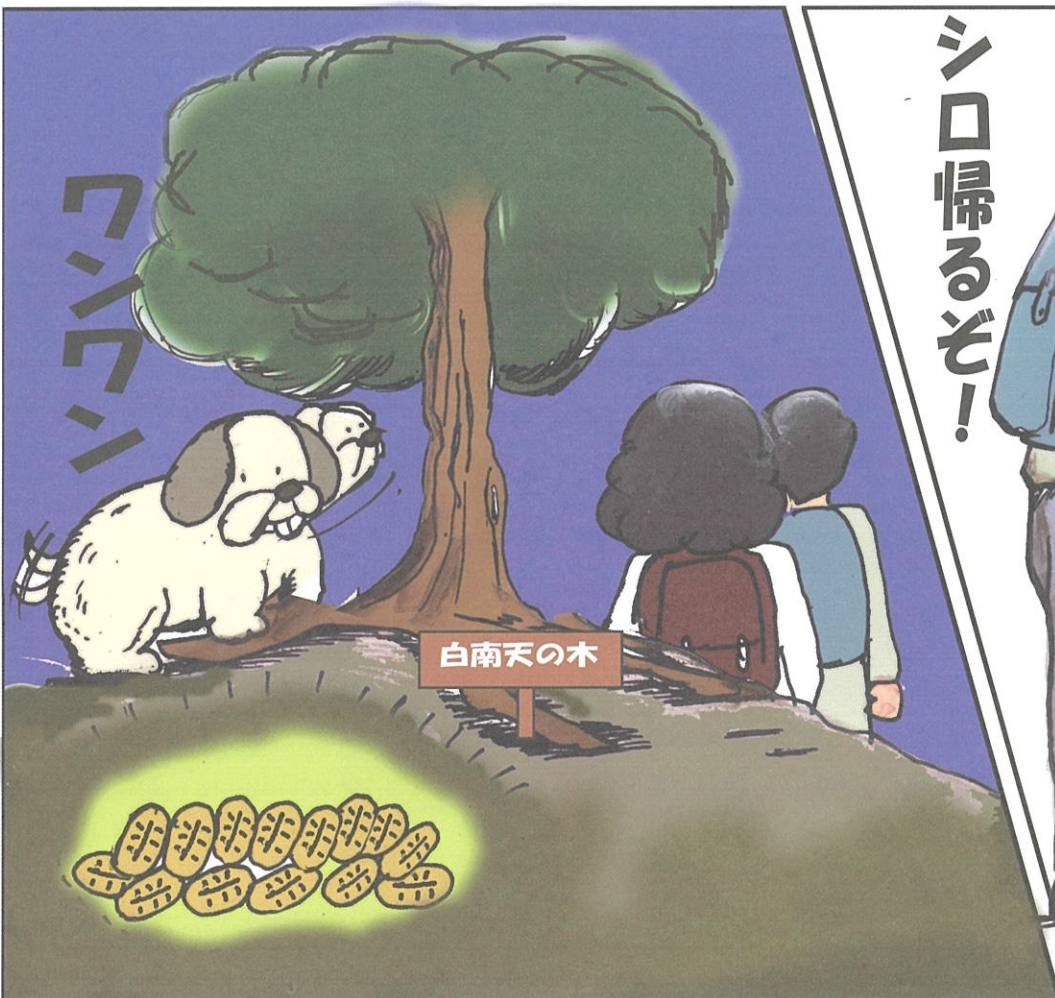
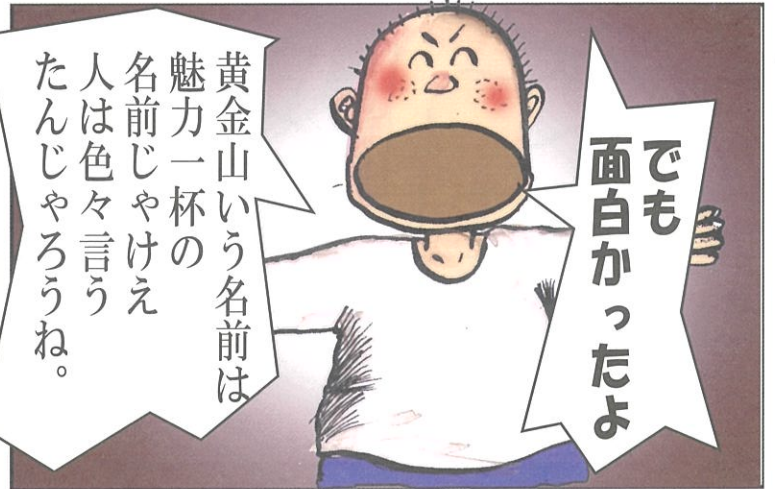
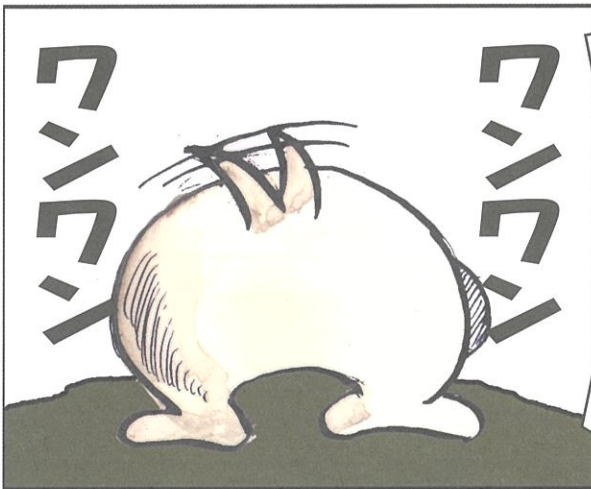
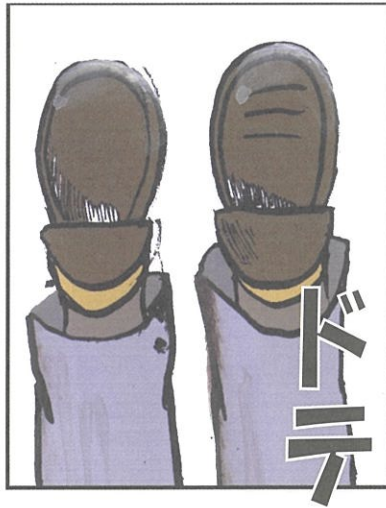
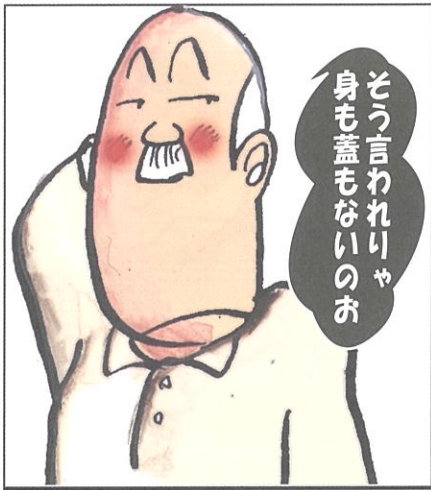


黄金山に
観音寺という寺が
あるのを
知っとるじやろ



丹が宝物？
本当かねえ





黄金山の歴史

仁保郷土史会 中野光夫

広島湾の要衝にそびえる、標高212.2mの山が黄金山で、もとは島でした。島としての痕跡は、広島市立楠那中学校東側の山すそにある、海水に洗われて丸みをおびた岩鼻や、仁保4丁目の溝にある雁木があります。また、本浦と仁保地区には島独特の迷路のような狭い路地があり、民家が軒を連ねて密集しています。

周囲は、約4^{km}で中腹まで山畑があり、麦が実る6月ごろには、島全体が黄金色に輝いていました。中腹から上のほうまで、きれいに草刈りが行われ、灌木は薪に、草は船をたてる（船底に付いたフジツボなどを焼き落とす）ために使用され、川の中は掃いたようにきれいになっていました。

この島には、大和時代（390年）から人が住みはじめ、漁業と山畑農耕をしながら暮らしていました。仁和年間（885年）には、早くも安芸国沿岸部で隆盛をきわめ、一国一社の正八幡宮が置かれていました。それは、広島湾内に入るすべての船は仁保島の領海を航行しなければならぬし、湾内には浅瀬と岩礁が多いので、どうしても水先案内が必要であり、帆別銭（帆の大きさによる謝礼金）・駄別銭（荷物の量による謝礼金）・水先案内料・警固料等の収入が島をうるおしていたからです。

このことから、安芸国制覇に野望を燃やす豪族たちは、仁保嶋とその領海を手に入

れようとして、奪い合いを繰り返していたのです。そのたびに、島民は苦しい目にあったのですが、この奪い合いが島と領海だけでなく、仁保嶋に住む邇保姫神社の神領衆・仁保嶋衆などを手に入れる戦いでもあったのです。それは、これらの人々がどの家にも1艘は船を持っており、多い家では大小三艘ぐらいの船を持っていて、ふだんは漁民であり農民でしたが、水軍や水夫として戦うことのできる島民であつたからです。仁保嶋の人々は、小さいときから船に乗っていたので、女性や子どもでも棹を自由に操ることができました。つまり帆船を操ったり櫓も棹もさすことができ、平水、沿海、近海などで、自由に操船して戦うことのできる海賊衆だつたのです。陸上だけでなく強力な軍隊でも、船に乗ればその力は充分に発揮できません。海戦の勝敗は、その海を知る水夫たちの、一糸乱れぬ団結の力で決まっていたのです。当時の豪族たちは、この仁保嶋の水軍の力を利用したのです。

仁保嶋城

城の起源はよく分かりませんが、室町時代の後期にはすでに城があり、府中の白井氏の支城であつたといわれています。後に大内氏に属していましたが、その後、毛利

氏の支配下におかれています。

城は外敵を防ぐための軍事的施設で、本丸が中心にあり、それを囲むように石垣や堀をめぐるした輪郭式や、本丸から三の丸まで直線的に連ねて作られた連郭式、段々に作られた梯郭式などがありますが、仁保嶋城は連郭式の山城でした。本丸は、頂上の駐車場北にある広島テレビのテレビ塔跡のあたりに、二の丸は駐車場の右側の丘の上に、三の丸は駐車場東側の展望台付近にありました。

明応4年（1495年）武田元信は、その警固を府中城主白井光胤に命じており、大内勢の侵攻があつたことも知られていません。大永元年（1521年）12月3日武田元信が滅びた後、やがて毛利の勢力がここにもおよんで、弘治元年（1555年）の厳島の合戦を前にして、たびたび仁保嶋城をめぐる争奪戦が行われました。

仁保嶋城の歴史

仁保嶋は、大内の支配下にありましたが、応仁（1470年）のころから無城主状態が続き、邇保姫神社が仕切っていました。しかし、水軍としては行動しており、領海内から入る帆別銭・駄別銭・水先案内料・警固料はばく大なものでした。これに目をつけたのが銀山城主武田元信で、配下の府中城主白井光胤に、このばく大な収入源をまかせたのです。

当時の仁保嶋は、水軍城であつたことが、地名からもよく分かります。香浦（本浦）のすぐ丘に、端城（たんじょう）・上城・



中城・濱城等があり、集落そのものが城でした。水軍は、標高50メートルくらいまでの山を本城としたのです。

明応4年武田元信が、白井光胤に仁保嶋と領海の支配を任せたことにより、大内は仁保嶋を横取りされたと激しく怒りました。

大内は、明応七年（1498年）、いよいよ仁保嶋を奪回することにしました。これを知った仁保嶋では、大河の住民を本浦に避難させ、船も全部本浦に移して、府中との兵員輸送にあてたと伝えられています。

大内軍は、草津に城をもつていた配下の羽仁軍を先陣に、5月12日に仁保嶋への攻撃を始めました。仁保嶋の地形に詳しい大内軍は、大河と丹那に上陸して、本浦のある飯山のふもとに迫り、一部は濱城まで迫ってきました。決戦は、丹那側西の山のふもとで行われ、大内軍の羽仁彌五郎が戦死し、首まで取られたので、大内軍は撤退しました。

大永元年（1521年）武田元信がなくなつたことにより、大内軍は武田軍壊滅の時期がきたと士氣を燃やしました。そこで大永2年3月17日に大内の水軍多賀谷武重によつて、白井がにいる仁保嶋への攻撃が始められたのです。仁保嶋では、早くから多賀谷水軍が攻めてくることを知っていたので、守りを固めていました。この戦いでは、大内水軍の多賀谷武重の左肩に矢が射られ、勝敗は決まりました。

船と船の戦いでは、戦列を整えて接船と同時に、指揮船の太鼓の合図に合わせて、各船の太鼓をたたき、ときの声をあげて一斉に矢を放ちました。特に敵の指揮船に対しては多くの矢を放ち、これを何回も繰り返

返して敵の戦列が乱れると、指揮船めがけて一斉に攻撃したと伝えられています。

仁保嶋の警固船の乗組員は、同じ集落（こ）れが後に講のもとになるの住民ですから、全員気心があつており、船が揺れながらでも矢を放つことができる、戦うことができます。水夫だったのです。両水軍の船を比較すると、多賀谷水軍の船は荒海用で、きつ水が深く船が大きかったので、船足が遅く小



回りが利かないけれど、仁保嶋の船はきつ水が浅く小型で船足が早く小回りが利くので、戦うときには有利であつたと思われま

大永四年（1524年）5月20日、大内義興は、2万騎で山口を出て、玖珂郡岩国の庄永興寺に陣をとり、ここから軍勢を二手にわけ、一手は芸州佐東の銀山城へ、もう一手は義興みずからを将として、一万騎あまりの大軍で、草津・仁保の城を攻め落とししました。

仁保嶋城は、攻めてくる大内軍の大船団を見て、勝利はないと悟り、谷に麦わらをしけば、滑って上がれないだろうと思い、各農家から麦わらを集めて谷に敷きつめました。しかし、攻めてきた大内軍に下から火をつけられて山火事になり、戦うことなく落城したと伝えられています。

弘治元年（1555年）7月10日に、陶晴賢の武將三浦越中守房清が、精銳700あまりを軍艦15艘に乗せて仁保嶋城に押し寄せ、楠那に上陸しました。上陸後、一気に仁保嶋の最弱点部の谷間に迫り、頂上に向かって攻めかかると思われていましたが、上陸するとすぐ本浦方面に向かって進撃を開始しました。この勢いに押された香川軍は、野山・まむし谷・馬越谷の線に退き、おもに野山周辺で激戦が行われました。

当時、このあたりは全部山畑で、本浦側のまむし谷には約200坪の用水池があり、その下に水田があつてマムシが生息してゐた。

戦いは、午前から午後になつて夕方まで行われ、香川軍の力も限界にきていました。このとき、仁保嶋衆の瓢箪屋次郎五郎と三左という柔術にたけた槍の使い手が、三浦軍の兵に組み付き5、6名を谷底に投げ落とししました。これをきつかけに、三浦軍は撤退することを決意しました。日はすでに、西の己斐の山に沈もうとしていました。香川軍も疲労困ぱいしており、追撃する力はありませんでした。



黄金の言われ色々

南区魅力発見委員会風土記編さん部会 森岡由紀子

黄金山という名前ですが、その黄金という名前にはいくつかの伝説めいた話があります。一見、どこにでもある山に見えますが、土地の古老の話では「ここに黄金が埋められているという話を聞いたことがあると言われます。どうしてそんな話が、地元に伝わってきたのでしょうか。この山にも秘められた歴史があるようです。」

黄金並に貴重だった丹

時がたち、島は仁保島と呼ばれるようになりました。この名は、島内の邇保姫（にほひめ）神社の祭神、爾保都比売神（にほひめのみこと）に由来するという説も。邇保姫神社には、「神功（じんぐう）皇后が、航海の安全を神に祈ったところ、爾保都比売神から不思議な赤い土を使うようにとお告げをうけ、それで無事に海を渡れることができた。大和に帰る途中、爾保都比売神に感謝の念を表すためにここに作ったお社が始まりである」という由緒が伝わっています。爾保都比売神がもたらしたとされる赤土は、古くは丹（に）と呼ばれた硫化水銀。弥生時代には赤色顔料として使われ、魏志倭人伝にも登場。卑弥呼の顔に塗られていたかもしれないものです。「爾保都比売神がここに祭られたのは、不思議な力を持つ丹が埋まっているからではないか。」

と考えていた人達がいたとしても不思議はありません。そこから黄金が埋まっているという話に結びついたのではないのでしょうか。

水軍が埋めた黄金

室町時代、安芸国の守護 武田元信から邇保島の所有と領海権を保障された白井光胤が、山頂に城を作りました。彼らは配下とともに瀬戸内海に船を漕ぎ出し、地理に不案内な船に乗りつけて水先案内や他の海賊から身を守ってやることで、金品を要求する海賊行為を行っていました。厳島に参拝する船は、格好の獲物です。

また武田氏配下の水軍として、この島に幾度も押し寄せる大内氏の軍を撃退。しかし、戦乱の世の常、1527年大内方に寝返ります。1551年大内氏が守護代陶氏に滅ぼされた後は陶氏に味方したので、厳島合戦の直前に城は毛利勢に攻略されます。豊臣秀吉が全国を平定したあとは、城も水軍の城としての役目を終えていきました。しかし、この山には城があり、攻めたり奪い返されたりした歴史は語り継がれます。そこから「城からお侍が逃げ出す時、宝物を山の中に埋めたのでは。」という話になったのではないのでしょうか。

山号として付けられた黄金山

仁保のシンボルとして親しまれているこの山の名前は、もともと城山（じょうやま）と呼ばれていました。黄金山という、別の名前がついた由来には、いろいろな説がありますが、天正十九年（1591年）から慶長元年（1596年）まで仁保城の城番であった三浦兵庫頭元忠が、菩提寺として観音寺を創建したときの山号が「黄金山」であったことから、そのころからこの名称が付けられたものと考えられます。

黄金という名前の持つ力

黄金、この言葉は、多くの人の心をひきつけます。何もなさそうなこの山にも、歴史あり。しかし、神様、水軍の城にかかわる二つの話から、本当に黄金伝説が生まれたのかは、遠い昔の話で推測の域を出ません。これ以外にも、山麓の麦畑が夕日で黄金に輝いて見えたから・・・など、黄金山の黄金伝説はまだ探せばありそうです。



参考文献

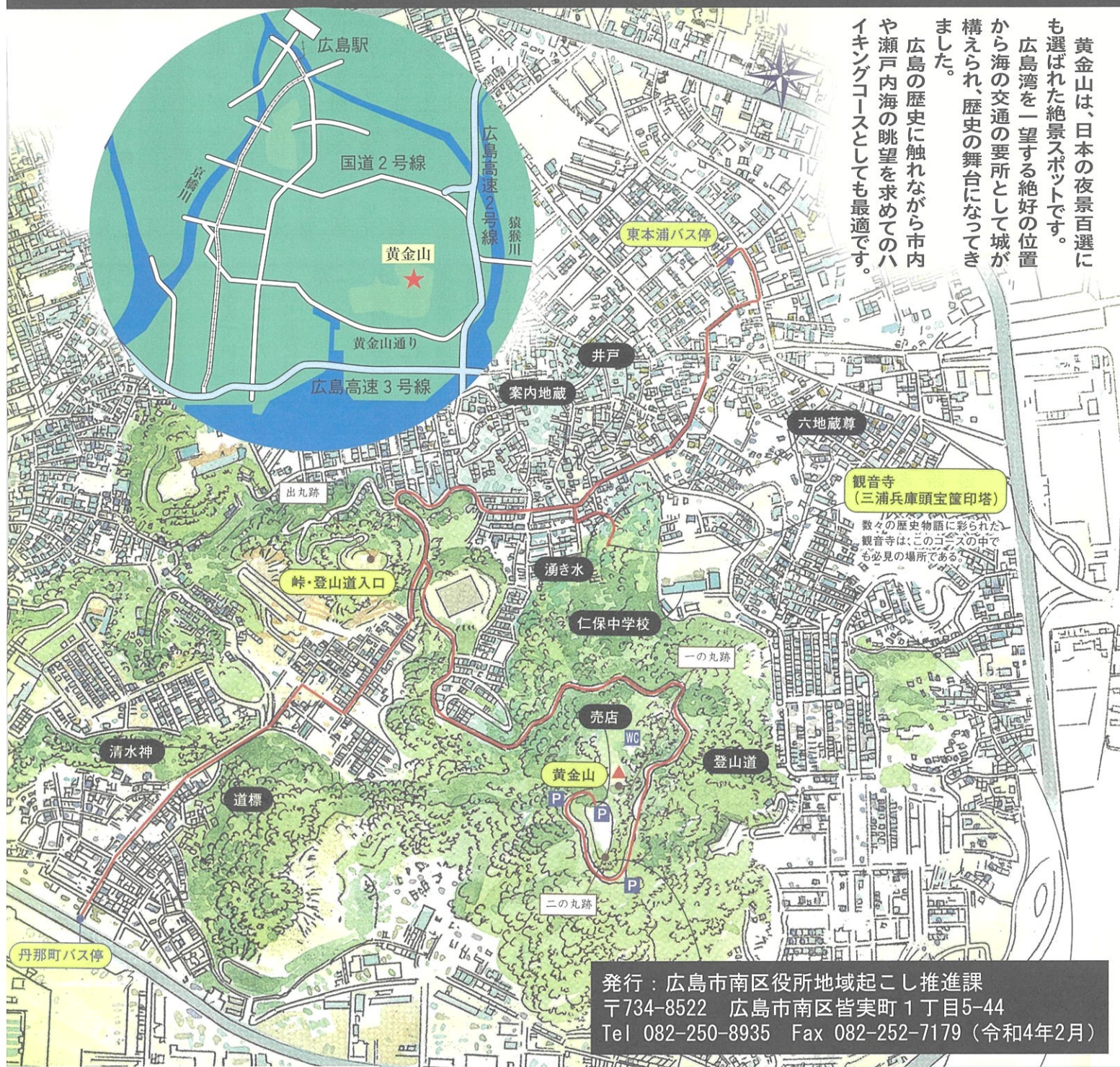
郷土の歴史 仁保嶋城 仁保郷土史会 中野重男
広島 仁保島山麓紀 戦国水軍の興亡 宇田川 武久

黄金山見どころマップ

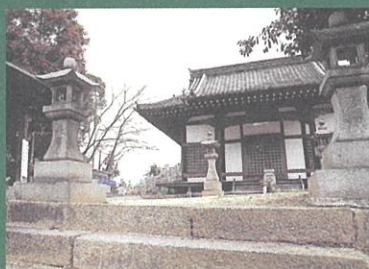


黄金山は、日本の夜景百選にも選ばれた絶景スポットです。広島湾を一望する絶好の位置から海の交通の要所として城が構えられ、歴史の舞台になってきました。

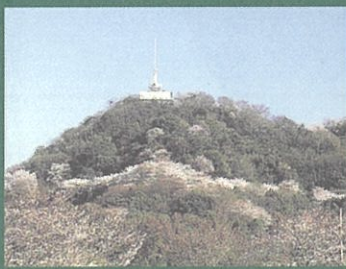
広島島の歴史に触れながら市内や瀬戸内海の眺望を求めているハイキングコースとしても最適です。



発行：広島市南区役所地域起こし推進課
〒734-8522 広島市南区皆実町1丁目5-44
Tel 082-250-8935 Fax 082-252-7179 (令和4年2月)



黄金山観音寺
黄金山観音寺という山号は歴史上、黄金山という名称が公式に登場した最初として知られている。



黄金山の桜
黄金山の登山道に沿って約5千本の桜があり、春になると一斉に花を咲かせます。

広島駅

電車

県病院前

八丁堀

丹那・バス停

バス

峠・登山道入口

徒歩 35分

黄金山山頂

徒歩 35分

観音寺

徒歩 35分

東本浦バス停

徒歩 20分

広島駅

バス